論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号

氏　　名　　笠井　俊和

論　文　題　目

植民地時代のボストンにおける船乗りと西インド貿易（1680年 - 1739年）

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	和田光弘
委員	名古屋大学教授	周藤芳幸
委員	名古屋大学教授	羽賀祥二
委員	名古屋大学准教授	加納　修
委員	愛知県立大学准教授	久田由佳子

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、1680年から1739年におけるイギリス領アメリカ植民地の港町ボストンに焦点を当て、ボストンの船舶による西インド貿易の構造と、その貿易に従事した船乗りたちの役割を明らかにすることを目的とする。近世・近代のアメリカ史やイギリス史を考究するにあたって、現在最も有効とされるアプローチ、大西洋史（アトランティック・ヒストリー）を参照枠とし、従来はもっぱら経済史の領域で論じられてきた貿易の史的研究と、その現場を担った船乗りの社会史とを融合させる斬新な試みである。論文は序論と結論に挟まれた4つの章から構成され、それぞれの章は考察する主題に正確に対応し、18世紀前半まで植民地最大の港町だったボストンや、重要な商品作物を産出したカリブ海域、そして多くの帆船が往来した大西洋上を舞台として、膨大なデータの精細な解析を通じて帆船時代の港町における貿易と船乗りの姿が描き出される。

第1章「ボストン船の西インド貿易」では、手書きの一次史料たる海事局船舶簿から論者が独自に構築したデータベースをもとに、ボストン船でのヒトとモノの動きを追跡する。アメリカ植民地の港を出入りした膨大な船のデータから、ボストン船に一般的だった移動経路や、船の大きさや船員の数といった特徴、船の行き先や取引方法を決定するうえでの船長の役割などが論じられる。

第2章「ボストン船の船乗りと航海」では、ボストン船の水夫たちに焦点を当て、新聞や裁判記録、聖職者の著作などの同時代史料から、ボストン船に乗り組んだ人々の典型像やその職業の危険性を考察する。史料に見られる水夫はいわゆる粗野な男たちであり、港町では再三にわたって問題視されたものの、洋上では船の大きさや貿易ルートが水夫の性格に影響を及ぼし、船上での不和の多寡を左右したことを指摘する。

第3章「植民地の非合法貿易」では、アメリカ植民地で広くおこなわれたとされる密貿易を扱い、通関システムの不備や、前述の海事局船舶簿の矛盾点を考察することで、いかに航海法の諸規定を犯すことが容易だったのかを明らかにする。さらに、データベースのほかに商人の書簡や船長の日誌を手掛かりに、中南米のスペイン領へと侵入したイギリスやその植民地の船による取引の特徴を探り、「有益なる怠慢」のもとに展開したイギリス帝国外部とのネットワークの実像を論じる。

第4章「船乗りによる情報の伝達と共有」では、当時の商船が、積荷だけでなく新聞や書簡の運び手でもあったことに着目し、情報伝達媒体としての船長と水夫たちの役割を描き出す。植民地の新聞記事を分析することで、船長らは船の母港や取引地に、大西洋世界各地の社会情勢を伝える役割を担っていたことを指摘する。また、船に乗る者にしか知りえない情報が多かった当時においては、船長のみならず水夫が語る奇想天外なストーリーさえも、新聞への掲載や水夫自身による語りを通じて、植民地人に娯楽として受容されていたことにも論及する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文は、近年急速に学術的関心を集めている大西洋史の視座から、アメリカ植民地時代の船乗りの実相を膨大な史料の分析をもとに実証的に描き出した研究であり、彼の地の研究水準に照らしても、その方法論や導出された結論において極めてオリジナリティの高い卓越した論考といえる。その主要な成果は以下の通りである。

第一に、膨大な量の出港・入港記録から独自に作成したデータベースを用いて、三角貿易ではなくシャトル貿易が優勢であった事実を導き出したことである。かかる状況は従来の研究でも指摘されてはいたが、当該の時期を対象に数量的に実証したことは高く評価される。またシャトル貿易が一般化する背景として、船長の判断の重要性を明らかにした点も貴重な成果である。第二に、船長だけなく一般の水夫にも焦点を当て、上記のデータベースに加えてナラティヴな史料も駆使して船乗りの世界を描き出したことである。ボストン船においては船長以外に平均８名程度の水夫が乗船しており、うち２〜３名が船長の縁者・知人、２〜３名が渡り労働者であったことを実証し、植民地船の乗組員の少なさ、地縁・血縁で結びついた船上の顔ぶれが、本国船と比して不和が少なかった理由であることを見出した。第三に、出港・入港記録の矛盾点から非合法貿易の存在を数量的に析出し、上記データベースと船長の日誌、商人の書簡を併用することで、スペイン領での密貿易の実態を炙り出したことである。とりわけログウッド貿易については、種々の新たな知見の提示に成功している。第四に、船乗りが担った情報伝達機能に関して、当時の新聞等の史料を丹念に読み込むことで、その具体相を細部に至るまで明らかにしたことである。海と陸との間で展開された情報のインタラクティヴな交換が、荒唐無稽な航海譚も含めて、当時の世界観を作り上げていたことを強く示唆し、説得的である。

本論文では各章ともに、膨大な手稿史料や新聞等の緻密な分析にもとづいた論証が開陳され、析出された事実と導出された結論は強い説得力を有する。とりわけ大量の数量データから論者が構築したデータベースは、アメリカ人研究者も強い関心を寄せるほどの高い水準に到達している。

しかし一方で、いくつかの瑕瑾も指摘しうる。全体としてオリジナルな研究であるがゆえ、最新の研究史を背景としながらも、論者独自の成果とそうでない部分が明示的でない箇所が認められること、時期区分が必ずしも自明でないこと、史料の制約等もあって、女性の役割の考察がなされていないこと、用語の用い方にやや不正確な個所が残っていることなどである。

しかしこれらはいずれも論者が一層の研鑽を積むことで十分に克服できる諸点であり、決して本論文の学術的価値を損なうものではない。よって審査委員一同、本論文が博士（歴史学）の学位を授与されるにふさわしいものと判定した。